

学校点描

2日目に1年生は職員室への入り方の指導を受けています。慣れないことから小さな声になってしまう生徒もいるようです

《最上中学校》

NO 1 H28. 4. 12

担当：教頭

始業式や入学式ではピンと糸を張った感じの生徒の様子に、生徒たちのやる気の高さを感じました。入学式の来賓の方々からは、2・3年生の微動だにしない姿勢で、式に臨んでいたことに対する感動の声をたくさんいただきました。新生生の様子と比べて、上級生を見ると中学校生活の1年間、2年間は、本当に人として大きな成長をする時期なんだと改めて感じます。入学式後の対面式では、2年生の生徒会役員が何も見ないで自分の委員会について紹介している姿が印象的です。卒業式の送辞で副会長のO・Aさんが何も見ないで最後まで堂々と見事に役目を果たしたことがきっと、周囲の生徒により影響を与えているのでしょう。

わたし達人間は、「立派だ、立派だ」と言われると本当に立派になるし、逆に「ダメだ、ダメだ」と言われ続けると本当にダメ人間になってしまいます。

人間という生き物は、たった一人では成長はできません。

人の中であってこそその成長

新学期が始まって3日目となりました。朝、1年生から3年生まで巡回してみます。1年生の教室はまだまだドキドキの雰囲気がありますね。互いのあいさつも遠慮気味です。当然のことでしょう。新しい環境、新しい人間関係は、いつもドキドキの不安の中に身を置かせます。

階段を上がって、学年があがるにつれ、交わす挨拶も大きな声になっていきます。3年生の教室では、教室の片隅に数名が集まって、運動会の踊りについてもう話し合いが始まっています。

会議のために早上がりだったこの日の放課後には、生徒のいない教室を見まわりました。いくつかの教室には、真っ白な雑巾が、棚の中やその近くに山となっているのに気づきます。お家の方が早めに準備してくれて、早めに持ってきてくれた生徒が多いのでしょう。

わたしが小学校5年生のクラス替えの時、担任として教室にやってきたのは、おっかなそうな男の先生でした。5年6組の44人。県内で最も大きな小学校にいたんです。学年全部で270人近く、全校で1000人以上の児童がいたのですから、クラス替えになる度、周りには、知らない人ばかり。ただでさえ、不安だというのに、担任の先生は、ブスーとしたおっかなそうな人。もう、4月のドキドキは最高潮でした。挨拶もそこそこに、おっかなそうな男の先生が、明日まで持ってくる物を生徒に伝えます。

「明日まで、掃除で使う雑巾を、1人1枚持ってくるように。雑巾は、お家の人から、縫ってきてもらいなさい。みんな、それができるね。」

今と違って、雑巾なんてお店で売っている物ではありません。各家庭で縫ってこしらせる物だったのです。おっかなそうな先生が最後に言う、“できるね”という台詞は、“約束だから、絶対守れよ!”と聞こえてしまうんです。第1印象は、大切ですね。

「どうしても、無理だという人は、手を挙げて!!」

ふと見ると、隣の女の子が手をすく一と挙げました。「なんと、勇ましい、なんと無茶苦茶な」と思いましたね。でも、その女の子の目は、凜としているんです。

「あの、先生！！わたしのお母さんは、今、病気で入院しているんです。祖母も目が悪くて、縫い物はできません。わたしの手では、明日までは無理だと思います。」

なんと、ハッキリ、そしてなんと自分の思いを上手に伝える子だろう。隣の女の子を見て、なんか自分と住んでいる世界が違うような気がしましたね。

女の子に対して、先生はなんて言うのか、43人全員、水を打ったような静けさです。

「じゃあ、誰か、その子の分まで、1枚縫ってきてくれ。以上！」

みんな初めて会ったような人ばかりで、その子のことなんて知らない人ばかりです。みんなキョロキョロ、どうしていいのかわかりません。その女の子も、申し訳なさそうに下を向いてしまいました。

「1年の〇〇です。〇〇先生に用事があって来ました！」

3日目になると、自分の名前と用事がある先生の名前を大きな声で言って、職員室に入室する1年生が見られるようになりました。「いいね～」と思わず職員室にいた先生からお褒めの言葉をもらいます。あとで本人に聞くと、数日前の練習したときには声が小さくて注意されたから、本番でははっきり話そうと思ったそうです。

4月のドキドキは、時に大きな勇気を生みます。

新しいクラスが決まった日、家に帰ると、雑巾を明日まで縫って持っていくことを母に伝えました。でも、あの隣の女の子のことが頭を離れません。全然話をしたことのない子の雑巾を持っていくと、変におもわれやしないか悩みました。でも、思い切ってもう1枚、母に追加のお願いをしたんです。自分の勇気と、あの女の子の勇気を天秤にかけて考えたんですね。

次の日、新しい学級の5年6組に行くと、女の子の机の上に、30枚以上の真新しい雑巾があがっていました。わたしも、雑巾の山の上に、母が縫った雑巾をのせます。

「ありがとう。」女の子がにっこり笑顔で返してくれました。

教卓では、あのおっかなそうな先生が、やさしい笑顔の先生に変わっているんです。

どんなに小さなエピソードでも、人は人の中にあってこそ成長するんです。

それを最初に教えてくれた雑巾回収だったことを思い出したのです。

きりとりせん

ご意見・ご感想をお願いします。

Shinyatk1616n@yahoo.co.jp